



2012 年 8 月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 46

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 38 （聞き手 高橋素子）

高橋 > 水桶にうなづきあふや瓜茄子 蕪村

井戸水でしょうか？放り込まれた水桶の冷水の中で、ぷかぷかと戯れ合うように見える鮮やかな紫の茄子。それをうなづき合うと擬人化した蕪村の滑稽句ですが、節電が叫ばれ、蒸し暑い日が続きますと、なお一層この句の涼感が身に染みて感じられます。何か涼しくなるような一句、会長にもお願いしていいでしょうか？

会長 > はいはい、それでは一句。

淵に冷やされ退屈の大西瓜

昭和の子種から真桑瓜啜り

なかなか蕪村のようないい句は難しいですが・・・。

己が身をびしょ濡れにして水団扇

これは、涼しいでしょ。

高橋 > 随分涼しくなって参りました。ところで、蕪村には「忍冬の花」の句がありますね。

蚊の声す忍冬の花の散るたびに 蕪村

以前、会長に「なぜ蚊の声がするのか」この句のご解説をお伺いしましたね。

会長 > この句は感覚的な名句とされていますが、「蚊の声す」が分からなかった。なぜなのか？それを八木健が解き明かしたのです。エヘン！もう一度、ご説明しましょう。蕪村は画俳両道の人でした。忍冬、すいかずらの花を写生していて、細筆の先で今まさに散らんとする花を描いていた時のことです。花の蕊が長く垂れています。蚊の脚に似ている。花卉が翅か。そう思ったときに蚊の声がしたのです。勿論、空耳ですが、蕪村は句にしておこうと、思ったのです。「蚊の声す忍冬の花の散るたびに」。蕪村は、ふふふ！この句の出来た秘密は誰にも分からんだろう、と思ったに違いありません。以来、二百六十年。誰も解き明かさなかったことを八木健が解説したので、蕪村さんは不機嫌で、ブソンとしているらしい。

高橋 > ふふふ！面白いですね。あまり横道に逸れていては叱られてしまいますね。それでは、本日の本題に入らせて頂きます。今日は紅縁編「滑稽俳句集」の「冬地理」の部、季語は「枯野」です。

化け物の化け力なき枯野かな 夕市

大とこの糞ひりをはす枯野哉 蕪村

五六匹馬干しておく枯野哉 一茶

此頃は化けず枯野の石地藏 青牛

小便に腹のへつたる枯野かな 獅子

三蔵の悟空まち居る枯野哉 紫人

追付けば地藏なりける枯野哉 紅縁

会長 > 「化け物の・・・」、枯野と言えども木の形、草の形は夜道を行く人を怖がらせるものがある。枯れきってしまうと「化け物」ではないかという「想像」できるものも無い。「化け力」を失ったのである。

「大とこの・・・」、「大とこの」は「大男の」である。枯野に脱糞したのは「大男」だっ

たのだろうと想像しているわけです。大男に違いないと。

「五六匹・・・」、宿場の周囲は枯野なのでしょう。その日の旅を終えて鞍をはずして汗をかいた馬の体を水拭きしてやったのか、馬の体を乾かす風景。馬を干すという表現に滑稽ありですね。

「此頃は・・・」、枯野の石地蔵は「化ける」ものだったのでしょう。しかし、それは昔話の世界のことで、この頃は化けたりはしない。冷静ですね青牛さんは。

「小便に・・・」、枯野で用足しをした途端に空腹を覚えたということ。尿意を催してどこか用足しできるところはないかと、探しているときには、食欲どころではありません。用足しを終えた途端に空腹という正直が可笑しい。

「三蔵の・・・」、枯野の茫漠たる中に立っているのでしょう。空には金斗雲のような雲が浮かんで近づいて来る。孫悟空が乗っているに違いない。すると自分は三蔵法師ということになる。ロマンとは想像の産物、写生を発展させるのが想像力ですね。

「追付けば・・・」、枯野道を歩いていたのです。道連れの無い旅は、人恋しくなるものですね。前方に人影を見つけて急ぎ足。追いついてみたら、お地蔵さんだったという、拍子抜けの少し哀歓のある滑稽です。

高橋 > 本当に、紅縁はなかなか面白い滑稽句を詠んでいますね。「俗を用いて俗を離れる」離俗の考えを俳諧の要諦として弟子に伝えた蕪村も、こんな句を詠んでいたのです。次は「冬植物」の部に参ります。季語は「落葉」です。以前、「落葉」は木から離れて一度何処かに落ちてしまった葉っぱのことで、「枯葉」はまだ木についているか木から離れて空中を舞う枯れた葉の事だと、教えて下さいましたね。

太夫にもならぬ木どもは落葉哉 也有

五六間壁すり行落葉哉 梨翁

鳥めらが来ては屋根ふむ落葉哉 成美

会長 > 「太夫にも・・・」、山椒の紅葉はとてもきれいですね。こんなにも見事な紅葉になれぬ木々は、落葉になっているというのは山椒太夫をかけているのです。

「五六間・・・」、落葉の動きを描写しています。まるで人間のような動きですね。強い風に煽られて舞う落葉が描かれています。

「鳥めらが・・・」、「鳥めらが」と乱暴に呼び捨てています。おそらく糞で汚したりするのでしょう。

「屋根踏む」は室内に居てそれと分かる、つまり、板屋根なのです。小鳥が板屋根を踏み鳴らす落葉の積もる庭という風景は、風情ある茶室でしょうか。

高橋 > 成る程！板屋根なのですか。小鳥が屋根ふむ音が聞こえてきそうですね。次の季語は、「枯柳」「枯菊」「枯芒」「枯芦」です。ご解説お願い致します。

柳枯れて又化物の出でさうな 稲青

なんと菊のかなぐられうぞ枯てだに 鬼貫

枯芒昔婆々鬼あつたとさ 一茶

枯芦や足一ツある鷺二ツ 文水

会長 > 「柳枯れて・・・」、柳は風に揺れて人の顔を撫でて脅かす。お化け植物の代表格ですね。この句の場合は、枯柳はお化けの出現をサポートする脇役です。

「なんと菊の・・・」、枯菊となって引き抜かれる様子を描いています。枯れてなお、荒々しく引き抜かれる菊に同情を寄せています。

「枯芒昔・・・」、枯芒に「婆々鬼」を思い出したのですね。「あつたとさ」と伝聞にして描くことで、客観性にもたけています。

「枯芦や・・・」、鷺が片足で立っている。鷺は二羽なので足の合計は二本です。季語「枯芦」は「足」と掛詞になっています。

高橋 > 枯植物からは、昔から化け物や狐や鬼婆などを想像してしまうものなのですね。冬の植物の部、続けさせて頂きます。季語は「帰り花」「茶の花」「草枯」です。

家根葺がふしんな顔や帰り花 蕪村

茶の花や坊主の頭五つ六つ 子規

草枯れて狐の飛脚通りけり 蕪村

会長 > 「家根葺が・・・」、屋根の葺き替えは「普請」です。「ふしん顔」は「不審顔」。「帰り端」が「帰り花」です。掛言葉の遊びですね。

「茶の花や・・・」、茶の花を、茶坊主と見立てています。言葉遊びを糾弾した子規もつくったとは。

「草枯れて・・・」、狐の飛脚は「人」に化けた狐が「狐」に戻れなくなってしまった。仕方なく「すばしっこい」能力を生かして、飛脚になったという話です。句は狐の飛脚でも通りそうという風景ですね。

高橋 > 次の季語は「水仙」です。そう言えば、母親からお味噌汁の材料に庭の韭を摘むように頼まれた隣家の男の子が、水仙の葉を持って来たという笑い話の様な出来事がありましたよ。去留の句の様に、水仙の葉は葱や韭によく似てますね。

水仙に花ぞ咲ねばねぶか哉 去留

水仙の様な男に嫁ぎたし 紅緑

会長 > 「水仙に花ぞ・・・」、花の咲かない水仙は「根深葱」と同じだと言っていますね。「水仙の様な・・・」、「水仙の様な男」とは「すっきりしている」ということでしょうか。

高橋 > 成る程！この時代でも、男らしい男性よりも、水仙のような優男を好む女性が多かったということですね。これで「冬植物」の部は終わりです。
次は「冬動物」の部です。少し覗いてみましょうか。季語は「水鳥」「千鳥」です。

水鳥のおもたく見えて浮にけり 鬼貫

水鳥や向ふの岸につういつうい 惟然

關守が叱って曰く馬鹿千鳥 一茶

会長 > 「水鳥のおもたぐ…」、水鳥は羽を膨らませていますから、見た目には大きいのですが、水に浮くと軽々として見えますね。

「水鳥や向ふ…」、水鳥の句としてよく知られた句です。「つういつうい」が動きの描写として秀逸。

「關守が叱って…」、關守が馬鹿千鳥と叱ったのは、動きに敏捷性がなく、頭と目玉が大きいからでしょうか。

高橋 > 今日も面白いご解説有難うございました。もっと、もっとお話をお聞きしたいところですが、残念ながらお時間となってしまいました。本日も終わりは、今日の季語をお使いになって、虎造節で〆て下さいね。

会長 > 承知しました。

♪歳月やああああ枯野に落葉積りゐて
芒の枯れしい風情また ああ昭和の
遠くううなりいい果てえるうう♪♪